

史跡宇治川太閤堤跡発掘調査報告書

2010

宇治市教育委員会



石出し3全景（北から）

序

平成19年9月に宇治川太閤堤跡は発見されました。本遺跡は、豊臣秀吉が命じて築造した太閤堤の一部と考えられ、宇治の歴史を特徴付ける重要な要素であり、また当時の治水技術の高さを知る上でも歴史上重要な文化遺産であります。平成21年7月には、宇治市で3件目の国史跡として指定をいただいたところでございます。

宇治市では現在、本遺跡を保存するとともにその周辺を観光宇治の新たな拠点と位置づけ、ここを訪れる多くの人々にとって、時代を超えて宇治の歴史が体感できる場となるよう整備してまいりたいと考えております。

そこで、これまで推進してまいりました源氏物語を中心とするまちづくりに「秀吉と茶の湯」という新たなテーマを加えまして、宇治の歴史・文化や景観を守り育てるとともに未来に継承していくため、「宇治茶と歴史・文化の香るまちづくり構想」を策定いたしました。

今回の発掘調査は、国庫補助金の交付をいただき宇治川太閤堤跡のさらなる内容確認調査を行ったものです。調査では、本遺跡の一つの特徴でもあります石出しの構造の確認、また新たな石出しの発見という成果をあげました。今後は、遺跡の保存と整備活用について、さらに検討を進めてまいりたいと考えております。

末筆になりましたが、この発掘調査の実施にあたってご理解とご協力をいただきました京阪電鉄不動産株式会社、睦備建設株式会社をはじめとする地権者各位、また専門的なご指導をいただきました文化庁、京都府教育委員会をはじめとする関係機関、関係各位、ご支援をいただきました市民各位に対して厚くお礼を申し上げます。

平成22年3月

宇治市教育委員会

教育長 石田 肇

例 言

1. 本書は、京都府宇治市菟道丸山61番地他における史跡宇治川太閤堤跡の発掘調査報告書である。
 2. 本書は、宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書の第78集にあたる。
 3. 本書は、発掘調査の記録である基本的な図面を本文中の挿図とし、写真を図版として後半に収録することとした。
 4. 本書収録の遺構図は、現地で実施したデジタル測量からの打ち出しを下図とし、整理作業によって変更を必要とした部分に修正を加えトレースによって仕上げた。
 5. 本書収録の実測、遺構の製図については下記のものが行った。

永野宏樹、大下あかり、山本綾子。

6. 本書の図版に収録する遺物写真は、寿福写房（寿福 滋）に撮影委託した。
 7. 本書の執筆は下記のとおりである。

第 I 章 ······ 荒川 史

第二・III・IV・V・VI章 永野宏樹

8. 本書の編集は宇治市歴史まちづくり推進課文化財保護係が担当した。編集実務は永野宏樹が行った。



宇治市の位置

本文目次

第Ⅰ章 序 言	1
第1節 発掘調査の経過	1
第2節 発掘調査の実施方法	2
第Ⅱ章 宇治川太閤堤跡の位置	3
第Ⅲ章 検 出 遺 構	6
第1節 層 序	6
第2節 検出遺構の概要	6
第3節 主要遺構	7
第Ⅳ章 出土遺物の概要	13
第Ⅴ章 ま と め	14
第VI章 宇治川太閤堤跡延長部試掘調査の概要	15
抄 錄	

挿 図 目 次

Fig. 1 平成19・20年度検出遺構写真	1
Fig. 2 史跡宇治川太閤堤跡と周辺遺跡	4
Fig. 3 トレンチ配置図	5
Fig. 4 検出遺構概略図	7
Fig. 5 A0801 トレンチ検出遺構平面図	8
Fig. 6 B0901 トレンチ検出遺構平面図	9
Fig. 7 C0901 トレンチ検出遺構平面図	10
Fig. 8 C0902 トレンチ検出遺構概略図	11
Fig. 9 トレンチ位置図	15
Fig.10 調査地遠景（東から）	16
Fig.11 トレンチ完掘状況（西から）	16
Fig.12 北壁土層堆積状況（南西から）	16

第Ⅰ章 序 言

第1節 発掘調査の経過

A. 本書の目的

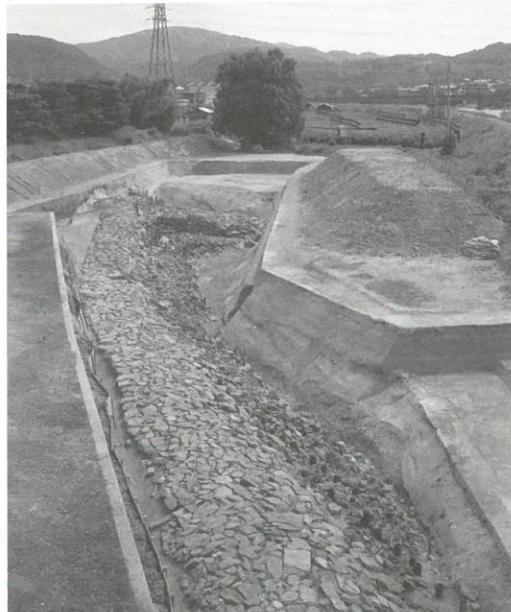
この発掘調査報告書は、宇治市宇治乙方及び菟道丸山地内で実施した、国史跡宇治川太閤堤跡発掘調査の成果を記録するものである。発掘実施年度は平成21年度である。

B. 発掘調査の経過

宇治川太閤堤跡は、平成19年度に新たに発見された遺跡である。この年、宇治市菟道丸山・宇治乙方地区において、約4.3haを対象とする土地区画整理事業が計画され、弥生～古墳時代にわたる乙方遺跡として発掘調査を開始した。調査開始早々に、大規模な護岸遺構を検出し、その後の調査によって豊臣秀吉が伏見城築城時に築堤した太閤堤の一部であることが明らかになった¹⁾。

その後文化庁等との協議を行い、国庫補助事業による範囲確認調査を実施し、さらに平成20年度にも引き続き範囲確認調査を実施した。その結果、遺跡は区画整理事業地内に約400mにわたって続いていることが明らかになり、さらにその護岸には石出しや杭出しといった水制が付設されていることも判明した。これらの調査成果を受け、平成21年1月に国の史跡指定に関する意見具申を行った。平成21年5月には文化審議会の答申を受け、平成21年7月23日国の史跡に指定された。

今回の調査は、3ヵ所の調査区を設定して実施した。B0901は、杭止め護岸と石出しを検出した地点で、石出し先端の状況を確認することと、平成19年度の調査から1年以上が経過した中で、杭の遺存状況を確認することを目的とした。C0901は、平成20年度に小規模な面積の調査を行った地点で、河岸段丘の崖面に石出しが造りつけられていたことを確認



① 石積み護岸全景



② 杭止め護岸全景



③ 石出し 1 全景

Fig.1 平成19・20年度検出遺構写真

した。前回の調査では、小面積であったため崖の裾まで掘り下げることができなかつたが、何らかの土留め工事を行つてゐることが予想されるためその確認を行うことを目的とした。C0902は、擁壁が川に向かって台形状に突出する地点の前面にあつた。当初から絵図・地籍図等により水制の存在が予想されていた場所で、水制の有無の確認を目的とした。

第2節 発掘調査の実施方法

A. 発掘調査の実施主体

本件発掘調査は、文化財保護法に基づいて宇治市教育委員会が発掘主体者となって実施したものであり、宇治市都市整備部歴史まちづくり推進課が実務担当した。

B. 発掘調査の体制

発掘調査責任者：宇治市教育委員会 教育長 石田 肇

専門指導：宇治川太閤堤跡保存整備検討委員会

委員長 工楽 善通（大阪府立狭山池博物館長）

副委員長 杉原 和雄（大阪国際大学教授）

委員 高妻 洋成（奈良文化財研究所保存修復科学研究室長）

委員 西野 由紀（龍谷大学講師）

委員 平澤 毅（奈良文化財研究所遺跡整備研究室長）

委員 増渕 徹（京都橘大学教授）

委員 宮井 宏（財団法人淀川水源地域対策基金理事）

宇治市文化財保護委員会 委員長 上原 真人（京都大学大学院教授）

発掘調査事務局：宇治市都市整備部歴史まちづくり推進課

課長 木下健太郎

主幹兼文化財保護係長 杉本 宏

拠点整備係主事 村重あゆみ

発掘担当者：歴史まちづくり推進課文化財保護係

主査 荒川 史

調査員 永野 宏樹

補助員：大下あかり、山本綾子

発掘作業：有限会社スペースバリュー

指導機関：文化庁記念物課、京都府教育委員会文化財保護課

協力機関：京阪電鉄不動産株式会社、睦備建設株式会社、国土交通省淀川河川事務所、独立行政

法人奈良文化財研究所、京都府山城北土木事務所、宮内庁書陵部桃山陵墓監区事務所、

丸山第一町内会、株式会社平和堂

協力者：畠 大介、橋本清一、鈴木一久、福井文雄（順不同敬称略）

第Ⅱ章 宇治川太閤堤跡の位置

A. 宇治川太閤堤跡の位置

宇治川太閤堤跡は宇治橋下流の宇治川右岸、京都府宇治市菟道丸山・宇治乙方に位置する。

琵琶湖に源を発した瀬田川（淀川）は、大戸川との合流点の南から峡谷へと入り、滋賀県と京都府の境で宇治川と名を変える。ここから木津川・桂川を合する淀の三川合流地点までを宇治川と呼ぶ。宇治川は急峻な谷間を抜け、宇治橋を過ぎると平坦な京都盆地に流れ出す。宇治川の流速は急に落ち、砂洲を形成するとともに多くの分流を形成する。

東部の丘陵地では前期から中期の古墳や、須恵器・瓦の窯跡群が分布し、中位段丘から丘陵裾部にかけては集落や後期古墳が、低位段丘面では集落遺跡が分布する。これらは縄文時代から中世にいたる各時期の遺跡が存在し、この地域が各時代を通して中核的な地域であったことがわかる。

宇治川左岸では、段丘上から沖積地にかけて折居川の扇状地が形成されており、扇状地上に古墳時代からの集落が形成される。また、平等院の南側に広がる高位の段丘面では、縄文時代後期の遺構や遺物を検出しており、古くから居住地となっていた。

B. 太閤堤について

太閤堤の概要 太閤堤は、文禄3年(1594)の豊臣秀吉による伏見築城に際して行われた大規模普請のこと、中でも巨椋池周辺に築造された堤防群の総称として使用されることが多い。主なものとして小倉堤、楳島堤、淀堤が挙げられるが、この中の小倉堤を限定して指す場合もある。また、秀吉が巨椋池周辺以外で築造した堤防も太閤堤と呼ばれている。滋賀県高月町を流れる高時川の右岸堤防では、長浜城主時代の秀吉が築堤したという伝承が4ヶ所で残されているようである²⁾。

巨椋池周辺地域 天正20年(1592)、秀吉は伏見指月の地に隠居屋敷造営の普請を始める。翌文禄2年(1593)に秀吉は伏見に入り、同年暮れには隠居屋敷を本格的な城郭に造りかえることと、広大な城下町の建設に着手する。この際に伏見周辺では大規模な普請が行われ、その一環として文禄3年以降、太閤堤が築かれることとなる。

現在の宇治川の西方には、巨椋池と呼ばれる大きな池が広がっていた。巨椋池には、宇治川や木津川、桂川の流路が入り組み、遊水池のような景観を呈していたのではないかと考えられる。昭和9年から始まった干拓事業によって現在は広大な農地となっているが、かつては盛んに漁業なども行われていた。この巨椋池を南北に向島から小倉にかけて貫いた「小倉堤」は、宇治川に新たに架けられた豊後橋（現観月橋）とともに大和街道として利用された。巨椋池の東辺、向島から宇治にかけて築かれた「楳島堤」は、宇治川の流路を現在のように固定して水流を伏見城下に導いた。楳島堤は左岸堤防として受け継がれ、昭和54年の堤防工事の際には、断面ではあるが楳島堤の遺構が実際に確認されている。伏見から淀にかけての宇治川右岸に築かれた「淀堤」は、巨椋池と横大路沼を分断し、宇治川と淀川を結んだ。つまり、水陸両方の交通を伏見に集中させたことになる。また下流淀川筋の堤防と合わせて、伏見を中心として大阪・奈良を結ぶ交通ネットワークを完成させたのである。



- A. 宇治川太閤堤跡 B. 試掘調査地 C. 太閤堤（槇島堤） D. 太閤堤（小倉堤） E. 太閤堤（蘭場堤）
1. 乙方遺跡
 2. 二子塚古墳
 3. 寺界道遺跡
 4. 尼ヶ塚遺跡
 5. 瓦塚古墳
 6. 日皆田古墳群
 7. 岡本庵寺
 8. 一里塚古墳
 9. 岡本遺跡
 10. 菴道丸山古墳
 11. 芝ノ東窯跡
 12. 広岡谷古墓
 13. 広岡谷遺跡
 14. 萬福寺境内
 15. 萬福寺裏山古墳
 16. 萬福寺塔頭跡
 17. 一番割遺跡
 18. 羽戸山遺跡
 19. 隼上り瓦窯跡
 20. 隼上り遺跡
 21. 隼上り古墳群
 22. 西隼上り遺跡
 23. 西隼上り埴輪窯跡
 24. 東中遺跡
 25. 大鳳寺跡
 26. 菴道遺跡
 27. 谷下り古墳群
 28. 門ノ前古墳
 29. 狐塚古墳
 30. 山本古墓
 31. 山本瓦窯跡
 32. 山本窯跡
 33. 二子山古墳北墳
 34. 二子山古墳南墳
 35. 山本古墳
 36. 宇治市街遺跡
 37. 宇治上神社
 38. 宇治上神社遺跡
 39. 宇治神社遺跡
 40. 恵心院山門前遺跡
 41. 興聖寺
 42. 槇島城跡
 43. 小倉遺跡
 44. 神楽田遺跡
 45. 春日森遺跡
 46. 茶壺藏跡(創建)
 47. 茶壺藏跡(再建)
 48. 宇治代官所跡
 49. 平等院旧境内遺跡
 50. 平等院庭園
 51. 塔ノ川遺跡
 52. 矢落遺跡
 53. 東山遺跡
 54. 池森天神遺跡
 55. 蛇塚遺跡
 56. 御廟古墓
 57. 下居遺跡

Fig.2 史跡宇治川太閤堤跡と周辺遺跡

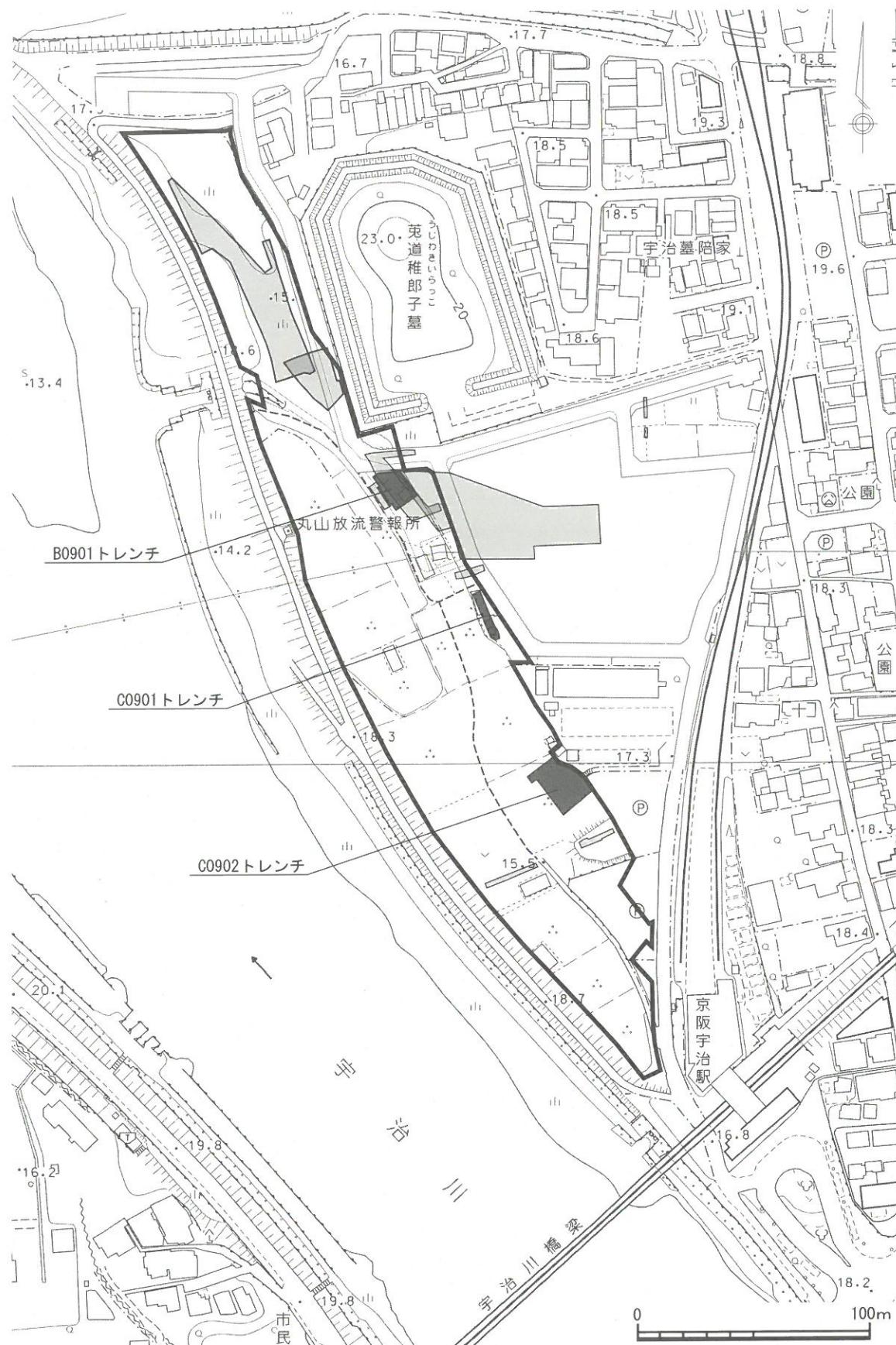


Fig.3 トレンチ配置図（太線が史跡範囲）

第Ⅲ章 検出遺構

第1節 層序

当該地の基本的な層序は下層から、河川堆積層、茶畠耕作層、現代整地土層の順となっている。

河川堆積層 河川堆積層の最下層には、護岸遺構の前面に堆積した中洲状の礫層が存在する。その上層に厚さ60cm~1.8mで細粒砂とシルトが堆積している。これは宇治川の洪水による氾濫堆積層で、10数枚の堆積層が確認できる。基底にシルト層が堆積し、上方に徐々に粗粒になる洪水堆積に特徴的な構造を示すものが多い。

茶畠耕作層 泛濫堆積層の上位に灰色を帯びた耕作土が存在する。これは調査地と現堤防の間の水捌けのよいかつての中洲上で近代から耕作が開始された茶畠に関するもので、氾濫堆積層の上に盛土をし整地を行っている。C0901トレンチ西壁では、石出し2先端の高さまで護岸遺構SX01の割石を利用して、数回にわたる盛土が行われた様子がよく観察できる。またC0902トレンチでは、地表下1mほどまで耕作に際して天地返しを行った痕跡が認められる。

第2節 検出遺構の概要

A. 遺構の表記方法

トレンチ番号の表記方法については、これまでと同様に「地区名+調査年度+トレンチ個別番号」とした。遺構の表記方法については『発掘調査のてびき』³⁾に準拠して、遺構の性格別アルファベット略号を用いた。表記の仕方については、「遺構性格名+略号+番号」を正式なものとし、「略号+番号」も併用することとした。遺構番号は通番とした。また護岸遺構については新たに遺構番号を付与せずに、いずれのトレンチの遺構も護岸遺構SX01として取り扱っている。

B. 遺構の全体状況 (Fig.4)

護岸遺構SX01は宇治川の現右岸堤防とほぼ平行にはしり、現堤防の内側20~75mほどにある。現在は茶畠が広がる遺構西側の砂礫堆積層と、遺構東側の河岸段丘などの後背地との境界線上に位置する。発掘調査にあたっては、遺構の分布状況や地形情報から遺跡全体を4地区にわけた。北から順にA~D区とした。平成19年度の調査は、A区で石積みと石張りからなる「石積み護岸遺構」を85m、B区で杭木によって垂直に築き上げられた「杭止め護岸遺構」を35m確認した。平成20年度の調査では護岸型式が不確定なC・D区において、河岸段丘に直接水制遺構を造り付けている状況を確認することができた。

現在のところ、護岸遺構SX01は検出長300mを測る。護岸遺構SX01の所々に造り付けられる水制遺構は、石造りの石出しを4ヵ所、杭を用いる杭出しを2ヵ所確認している。水制遺構は遺跡全体に配置されており、本遺跡の特徴のひとつとなっている。

第3節 主要遺構

A. A0801 トレンチの主要遺構 (Fig.5)

本トレンチの検出遺構は昨年度報告を行ったが⁴⁾、その際詳細な図面を掲載することができなかつたので、ここで再度調査概要と新たに図面を示すこととする。調査年度は、平成20年度である。

A0801トレンチは、石積み護岸遺構を検出したA0701トレンチに南接し、護岸遺構1、水制遺構1、庭園遺構1を検出した。護岸遺構SX01は石積み護岸の延長部15mを検出したが、崩落が進むため法面石張りの一部を確認するに留まった。トレンチ中ほどの護岸遺構SX01と庭園遺構SG02の接する部分では、下流側へ向かって150°の角度で3本の杭列を出し、内部に割石を充填する杭出し2が存在する。石出し1の上流40mに位置する。

庭園遺構SG02は護岸遺構のライン上に位置し、上下2段の池と洲浜状遺構で構成される。庭園遺構SG02は、護岸遺構SX01が埋没していくなかで、18世紀ごろに構築されたものと考えられる。

B. B0805・B0901 トレンチの主要遺構 (Fig.6)

B0805およびB0901トレンチは、A0701トレンチの南25mにあり、平成19年度に杭止め型式の護岸遺構を検出した調査区に位置する。

B0805トレンチは、石出し2先端部に敷設される水路工事に伴って平成20年度に試掘調査を行ったもので、石出し2先端部の状況確認を目的とした。試掘調査では捨石部を検出したものの、石出し2の特に上部構造の先端状況を確認するには至らなかつた。そこで今年度は未掘削部分の調査と、平成19年度に発掘調査・埋め戻しを行った杭止め護岸の木質の遺存状況の確認を目的とした。

B0901トレンチでは、主に石出し2の先端から上流側にかけての調査を行った。石出し2上部の石垣部の先端3分の2は、水流等による破壊を受け、崩

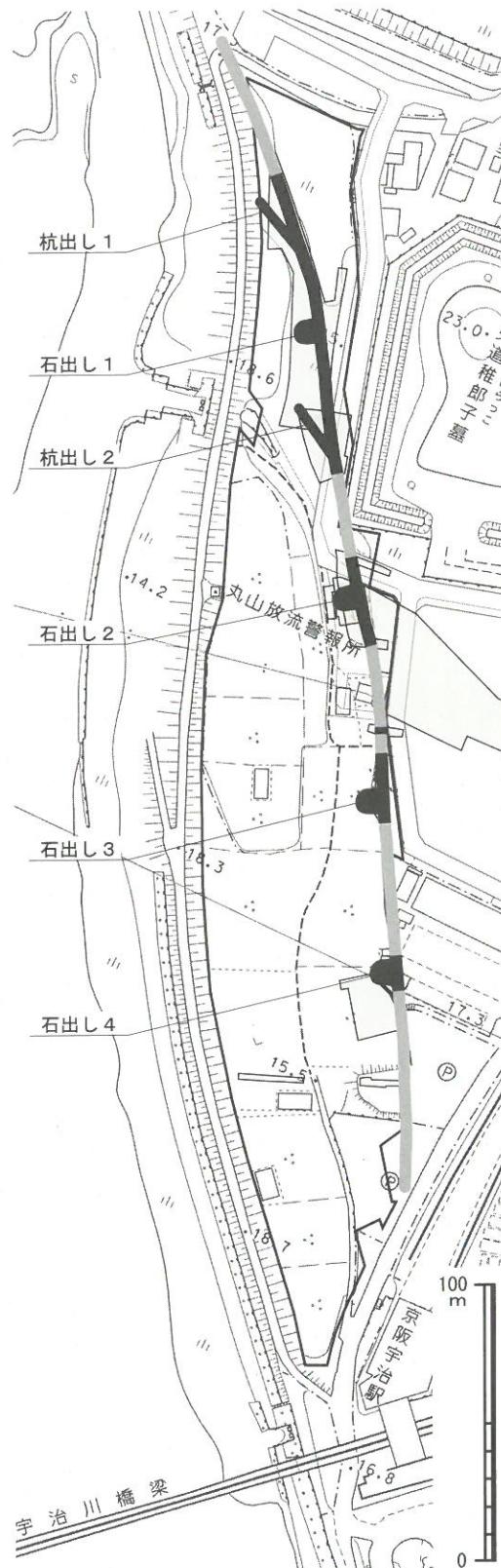
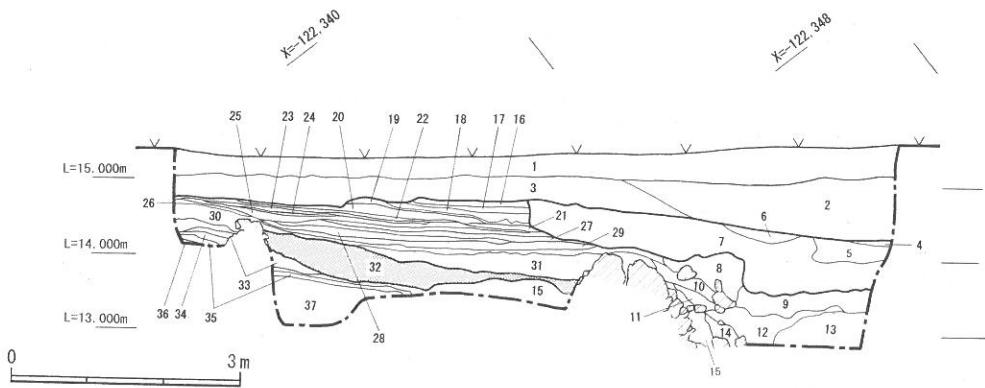
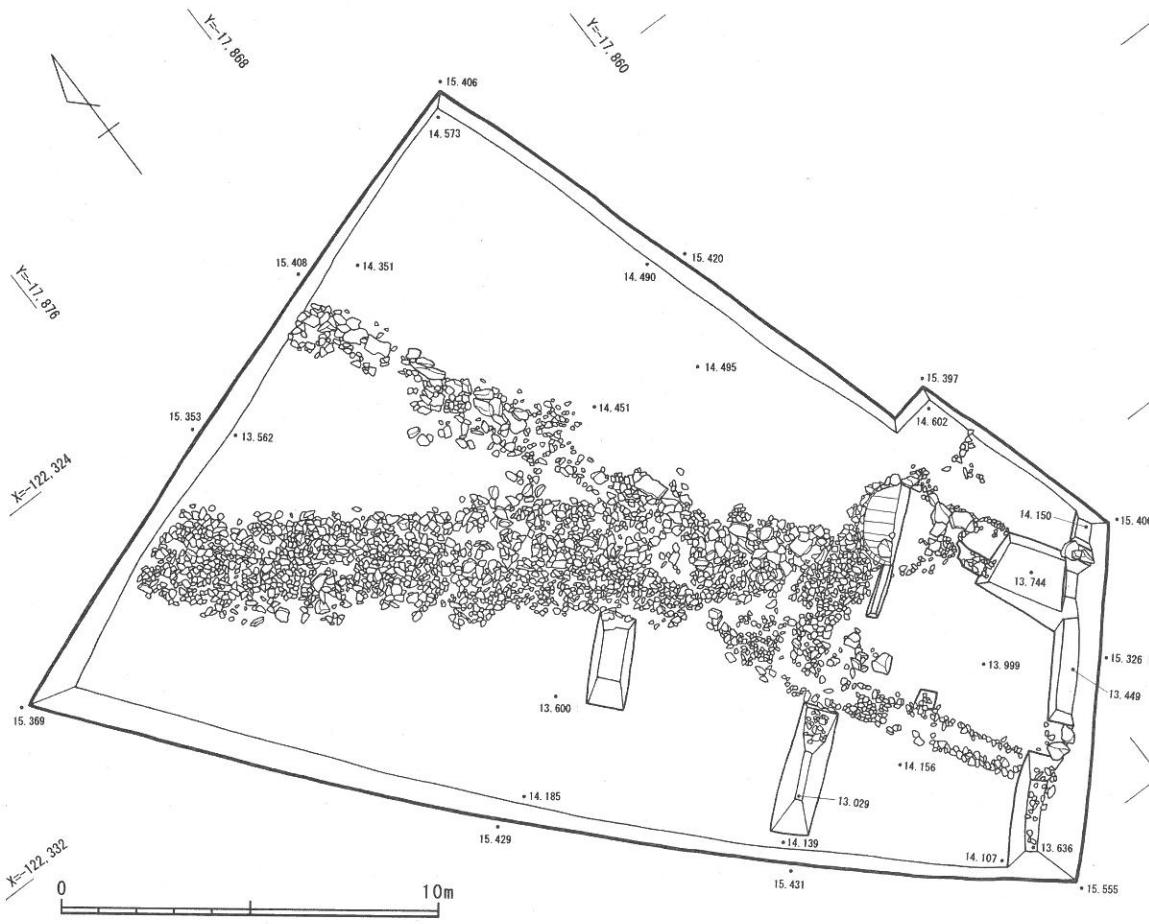


Fig.4 検出遺構概略図



- | | | |
|----------------------|-----------------------|----------------------|
| 1: 表土 | 16: 5Y6/4 オリーブ黄色シルト | 31: 10Y3/2 黒褐色粘質土 |
| 2: 2.5Y6/2 灰黄色シルト | 17: 5Y4/1 灰色粘質土 | 32: 廃棄瓦堆積層 |
| 3: 耕作土 | 18: 10YR4/1 褐灰色粘質土 | 33: 7.5YR4/1 褐灰色粘質土 |
| 4: 5Y5/2 灰オリーブ色粘質土 | 19: 7.5YR8/1 灰白色シルト | 34: 7.5Y5/1 灰色粘質土 |
| 5: 7.5Y5/2 灰オリーブ色粘質土 | 20: 5Y4/1 灰色粘質土 | 35: 10YR6/6 明黄褐色粗砂質土 |
| 6: 7.5Y8/1 灰白色粗砂質土 | 21: 粗砂質土 | 36: 5Y6/1 灰色粘質土 |
| 7: 5Y7/2 灰白色粗砂質土 | 22: 7.5Y4/1 灰色粘質土 | 37: 7.5YR3/1 黑褐色粘質土 |
| 8: 5Y6/1 灰オリーブ色シルト | 23: 2.5Y8/4 淡黄色砂質土 | |
| 9: 7.5Y7/1 灰白色粗砂質土 | 24: 炭化物堆積層 | |
| 10: 7.5Y7/1 灰白色粘質土 | 25: 10YR4/1 褐灰色粘質土 | |
| 11: 5Y6/1 灰色シルト | 26: 2.5Y8/2 淡黄色シルト | |
| 12: 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂質土 | 27: 5Y5/2 灰オリーブ色シルト | |
| 13: 10YR2/2 黒褐色 | 28: 粗砂質土 | |
| 14: 2.5Y6/4 にぶい黄色砂礫土 | 29: 粗砂質土 | |
| 15: 砂礫土 | 30: 7.5Y5/2 灰オリーブ色シルト | |

Fig.5 A0801 トレンチ検出遺構平面図



Fig.6 B0901 トレンチ検出遺構平面図
(B0701・B0805・B0901 トレンチを合成して作成)

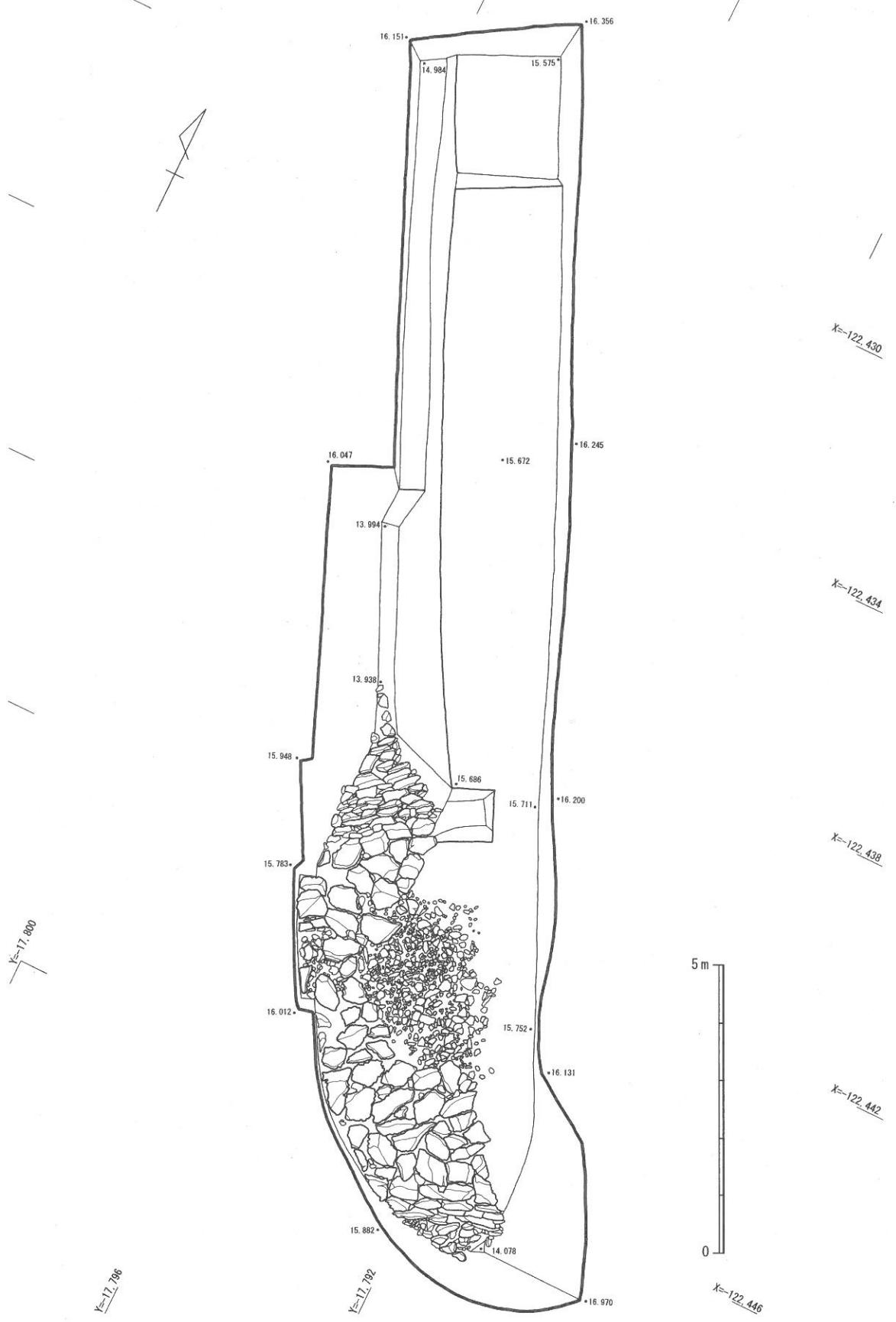


Fig.7 C0901 トレンチ検出遺構平面図

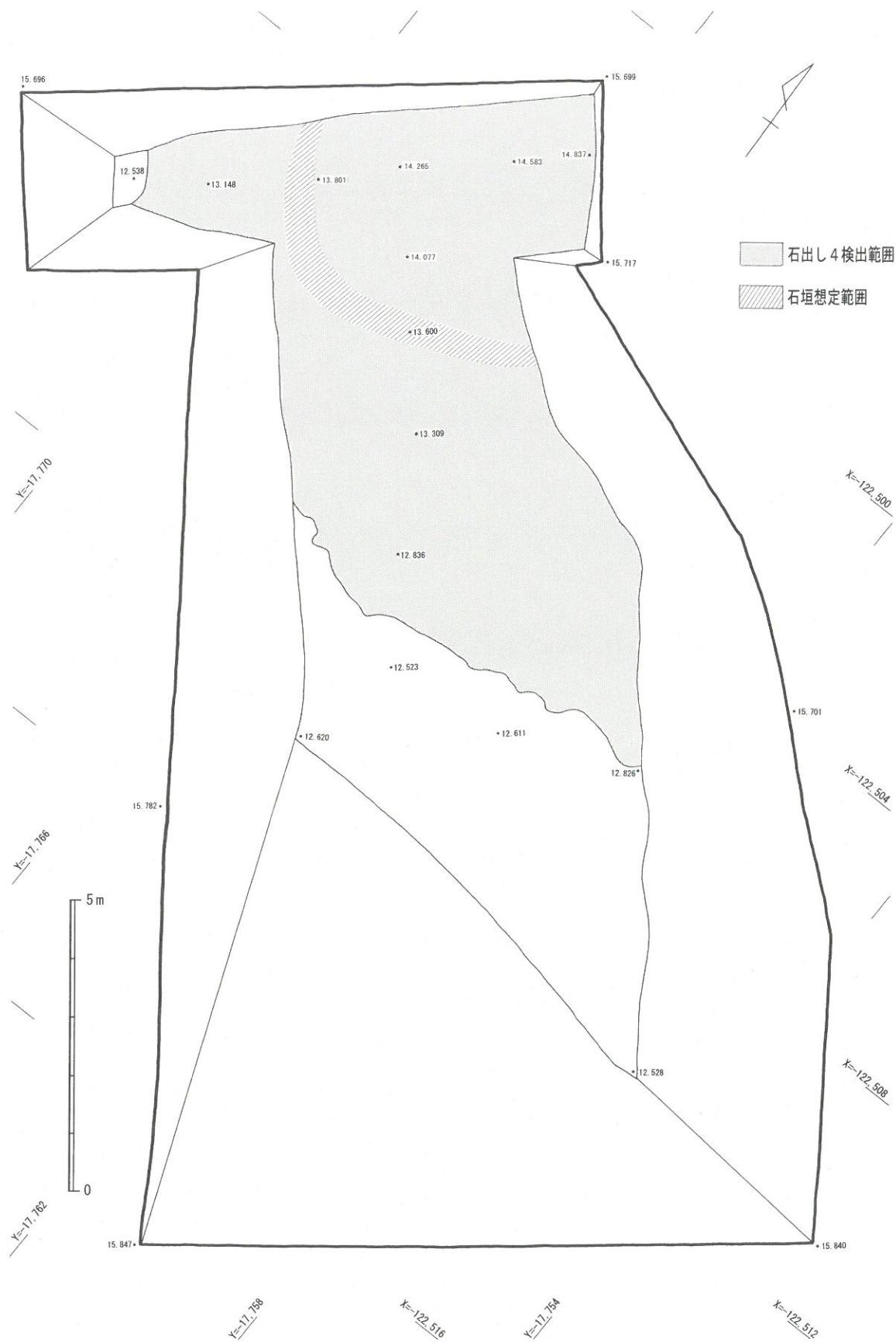


Fig.8 C0902トレンチ検出遺構概略図

落が進んでいる。しかし内部に詰め込まれた粘板岩割石の残存形状から、石出し1と同様に先端が緩やかな曲線を描いていた状況が確認できた。トレンチ北西隅では、天端（石出しの上面）に石張りが施されていたことを示すであろう板状割石をわずか2点ではあるが確認した。石出し2全体の残存高は2.3mで、捨石最下部では石垣を構成していたと考えられる崩落石が複数認められる。

C. C0901トレンチの主要遺構（Fig.7）

全体状況 C0901は菟道稚郎子墓の南側に広がる谷状地形の南端、段丘礫層との境界に位置する。石出し3の形状および護岸型式の確認を目的とした。トレンチ北半で護岸としての機能を担っていたと考えられる河岸段丘を、南半で石出し3の基部を検出した。

河岸段丘の様子 トレンチ北半で検出した河岸段丘では、上層に灰色の砂を含む拳大の礫が堆積し、下層に灰黄色の砂を含む人頭大の礫とわずかに粘板岩が堆積する。この段丘礫層の前面（川側）では、2本の直径15cmの杭を検出したが、段丘礫層と接しておらず、両者の関係は不明である。段丘礫層の前面、杭の上層には、川側へ傾斜する黄色粘土が堆積する。

石出しの基本形状 宇治川太閤堤跡で検出した石出しの基本的な形状は、上部の石垣部とその土台となる下半の捨石部からなり、護岸から90°の角度で築かれる。捨石部は、拳大から人頭大の割石を規則なく投入し、護岸から舌状に大きく張り出している。石垣部は平面台形状で、四方を石垣で囲み、内部に割石を充填する。石垣は、勾配に違いがあるものの、基本的にはすべて布積みで積まれる。

平成19年度に調査を行い、ほぼ全体を検出した石出し1の規模は、捨石部の最大幅15m、検出突出長10m、高さは1.2mを測る。石垣部は基部幅9m、突出長8.5m、高さは1mで、他の石出しもほぼ同規模である。

石出し3 石出し3はトレンチの南半で基部を検出し、上流・下流両側の石垣と天端石張りを良好な状態で確認した。石出し2の上流75mに位置する。基部のみの検出に留まったが、段丘礫層から斜めに築かれた石垣の方向から平面は台形を呈すると思われる。天端の中央部には幅3mの平坦面があり、そこから両側へ幅1.5m、15°の勾配で石張りが緩やかに傾斜する。続いて石出し2と同様の45°の勾配で石垣が2mの高さで積まれ、断面も台形状を呈す。

検出長3.5mのうちでは、上部幅（石垣の上端から上端）7m、下部の検出幅9mを測る。石垣は、石出し2と同規模の長さ20~60cm、厚さ20cm、控え30cm程の板状割石を使用し、布積みで積まれ、両石垣とも背面の段丘礫層に直接接している。天端（石出し上面）には、石積み護岸遺構のような石張りが厚さ10cmほどの暗褐色土の上に施される。長さ60cm、幅40cm、厚さ15cmほどの板状割石が使用され、内部には拳大の割石が充填される。

D. C0902トレンチの主要遺構（Fig.8）

全体状況 C0902トレンチはC区の南端にあり、昨年まで茶畠が営まれていた場所である。菟道・宇治の字界より南の段丘礫層の前面には擁壁が築かれており、本トレンチに隣接する擁壁には台形状の張り出しがある。この突出部は、擁壁が築かれる以前の明治期の地籍図等でも確認することができ、当初より石出しの存在が予想されていた地点である。遺跡内で4つ目となる石出しと瓦捨て場SX403を検出した。

石出し4 石出し4は擁壁突出部の前面で検出し、石出し3から62m上流に位置する。擁壁突出部を囲むように広がる捨石を確認し、その中ほどで上部石垣の一部を検出した。

擁壁前面に広がる粘板岩割石を検出した当初は、裾から擁壁直前に至るすべてが石出し下半の捨石であり、上部構造は擁壁内に包蔵されていると理解をしていた。しかしこのように仮定すると、石出し4捨石部の高さは2m以上となる。石出し1では高さが1.2mであったのに対し、2倍近い高さということになるので、再度精査を行うこととした。するとトレンチ中ほどで上部石垣の根石、あるいは石垣を構成していたと考えられる馬蹄形を示す板状割石列を検出した。そのため石出し4は、上半の石垣部が大きく削平を受けた状態であり、擁壁内部には基部を残すのみであることが予想される。

瓦捨て場SX403 SX403は、トレンチ南半で検出した近世の瓦捨て場である。土層断面の観察の結果、少なくとも10数回にわたって瓦の遺棄が行われている。瓦片・灯明皿・陶磁器・瓦製土器・窯壁破片が出土している。この瓦捨て場が、江戸期を通じて宇治の在郷瓦師として生産活動を行った山田源左衛門の窯場に関するものであることは、「宇治山田源左衛門」の刻印からも明らかである。山田源左衛門の瓦窯は、本トレンチ東側の河岸段丘上に想定されており、当該地がその廃棄場所になったことは当然のことであろう。窯壁破片や瓦製窯詰道具が出土していることは、本トレンチの至近での瓦窯の存在を示している。最初期の廃棄層には、山田源左衛門の遡ることのできる造瓦活動最古の17世紀後半の瓦が含まれ⁵⁾、想定される護岸遺構の埋没過程とも合致している。

第IV章 出 土 遺 物 の 概 要

今回の発掘調査で出土した遺物の総量は、出土時点においてコンテナバットに35箱ほどである。種類は多い順に、瓦、磁器、陶器、土師器、その他となる。瓦および陶磁器類が共に15箱ずつと、大半を占める。時代は近世が主体で、古墳時代の須恵器がわずかに伴う。本報告書では、整理作業の時間的な制限から、一部を写真図版に集合で掲載し(PL.15・16)、本文では概要を示すこととする。

遺物がまとまって出土した遺構としては、C0902トレンチの瓦捨て場SX403がある。瓦捨て場SX403の出土状況はC0902トレンチの南半、石出し4の上流側に3mの厚さで堆積し、10回をこえる遺棄が行われている。一部宇治川の水流によって運ばれたものが、埋没過程にあった石出し4の上面からも出土している。B0901・C0901の両トレンチでは治水遺跡の性格上、ほとんど遺物の出土を見なかった。

出土した瓦の種類は、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、軒棧瓦、棧瓦、鬼瓦、瓦埠、菊丸等多種に及ぶ。また数点ではあるがつづみ型のトチンや、「ト」字形をした窯詰め時に瓦どうしを密着させないための瓦質の窯詰道具も出土している。出土瓦の年代は、17世紀後半期から18世紀後半期が想定できる。土師器は見込みに圈線を持ち、口縁部に油ススが付着する灯明皿が6点出土しており、いずれも17世紀後葉に比定することができる。陶磁器類についても、概ね上記のような時期を想定することができる。

第V章 まとめ

A. 水制遺構について

宇治川太閤堤跡の水制遺構 宇治川太閤堤跡では現在、水制遺構を2種類6ヵ所検出している。水制遺構は、堤防や護岸への水流の激突や洗掘を防ぐための構造物で、石造りの「石出し」が4ヵ所、杭列から成る「杭出し」が2ヵ所ある。石出しの上部は石垣積みで築かれ、当時急速に発達していた築城技術が河川工事において転用されていたことがわかる。また杭出しは、本来杭列のみを打ち込むだけの水制の中でも非常に簡易なものであるが、本遺跡では杭列間に護岸と同様の粘板岩割石を充填している。これは杭出しの補強のためであるか、機能上の施工であるかは現段階では不明である。

水制遺構の配置 現在確認している300mの護岸遺構SX01のうちで、水制遺構の配置は等間隔で行われていない。石出しの建築間隔は、北から93m、77m、62mである。杭出しは70mの距離で建築され、2つの杭出しに挟まれた石出し1との距離はともに35mである（杭出しは護岸と接する根元、石出しは護岸ライン上の中点を計測の基点とした）。和歌山県窪・萩原遺跡では、近世初頭の建築と考えられる230mの護岸遺構に3つの水制が造り付けられている。それぞれの距離は、水制A-B間が70m、水制B-C間が80mである⁶⁾。本遺跡の石出しの建築距離は、多少の前後はあるものの概ね70~80mで、当時としては平均的なものであると言えるかもしれない。しかし2つの杭出しと石出しは近距離で築かれており、また杭出しと石出しを交互に設置する例も他には見ることができない。そのため杭出しには、水制以外の船着場等の機能が与えられていたのかもしれない。

B. C区以南の護岸遺構について

遺跡の南半、C区以南の東側には低位段丘面が広がっている。これまでの調査で、この地区では段丘面に直接石出しを造り付けていることが確認できたが、護岸遺構本体の様子については不明なままであった。今年度の調査でも護岸型式の解明を目的としたが、擁壁の存在やすぐ西側に茶畠が広がるため、現在の調査可能な範囲では確認することができなかった。河岸段丘面は当然ある時期の岸面である。そこへ太閤堤建築時、その前面に何らかの手当てを行った可能性は考えられる。しかしこの様な例は見ることができず、C区以南の護岸型式の詳細については今後の調査に期待される。

(註)

- 1) 宇治市教育委員会『宇治川太閤堤跡発掘調査報告書』 宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書第73集 2009年。
- 2) 長浜市史編さん委員会『長浜市史』第2巻 長浜市 1998年。
- 3) 文化庁文化財保護部監修『発掘調査のてびき』第一法規 昭和41年。
- 4) 註1) 文献。
- 5) 中尾正治「八幡近郊と南山城地域で名を残した瓦師」『京都考古』69号 1993年。
- 6) 村田弘『桂田荘（窪・萩原遺跡）』 財団法人和歌山県文化財センター 2000年。

第VI章 宇治川太閤堤跡延長部試掘調査の概要

A. 発掘調査の経過

宇治川太閤堤跡では、当初より史跡地外に向けての護岸遺構の展開を理解することが大きな課題であった。本試掘調査は、宇治川太閤堤跡の想定延長線上にある宇治市菟道平町78番における開発計画に先立ち、事業者との協議の結果、平成22年3月8日から5日間の日程で範囲確認調査を実施したものである。当該調査地は、宇治川太閤堤跡の下流約600mの宇治川右岸にあたる(Fig.2)。

B. 発掘調査の概要 (Fig.9)

調査地の位置 調査地は、東方の三室戸寺東北の山中から流れ出て宇治川にそそぐ戦川の河口部に位置する。現在では戦川から60mほどの距離をとるが、河口部が直線状に付け替えられるまでは、蛇行する戦川に接する場所であった。調査地は周囲の茶畠より2mほど高く、北側には宇治川太閤堤跡のC区と同様な擁壁が築かれている。そこで、この擁壁を護岸遺構の延長ラインと想定して、調査区を設定し掘削を行った。基本的には、戦川及び宇治川の氾濫原を検出することが予想された。

検出遺構 当該地の基本的な層序は下層から、河川堆積層、旧耕作土層、盛土層、現代整地土層の順となっている。河川堆積層は下位から礫層・粘質土層・砂層・砂礫層の順に堆積する。砂礫層では、上方に向けて粗粒になる洪水堆積の特徴を示す。明確な遺構・遺物の検出を見なかつたため、トレンチ西端で深堀りを行ったところ、地表下4mの褐色礫層で出水を見たため掘削をとりやめた。

C. まとめ

今回の試掘調査では、予想した通りの土層堆積を確認するに留まり、明確な護岸遺構を検出することはできなかった。宇治川右岸に築かれた護岸遺構が、宇治から伏見城に至る全域にわたるものなのか、あるいは点在する集落などの要所のみに築かれたのかは未だ不明である。広域にわたる護岸遺構の築造状況の確認は、今後の調査に期待される。

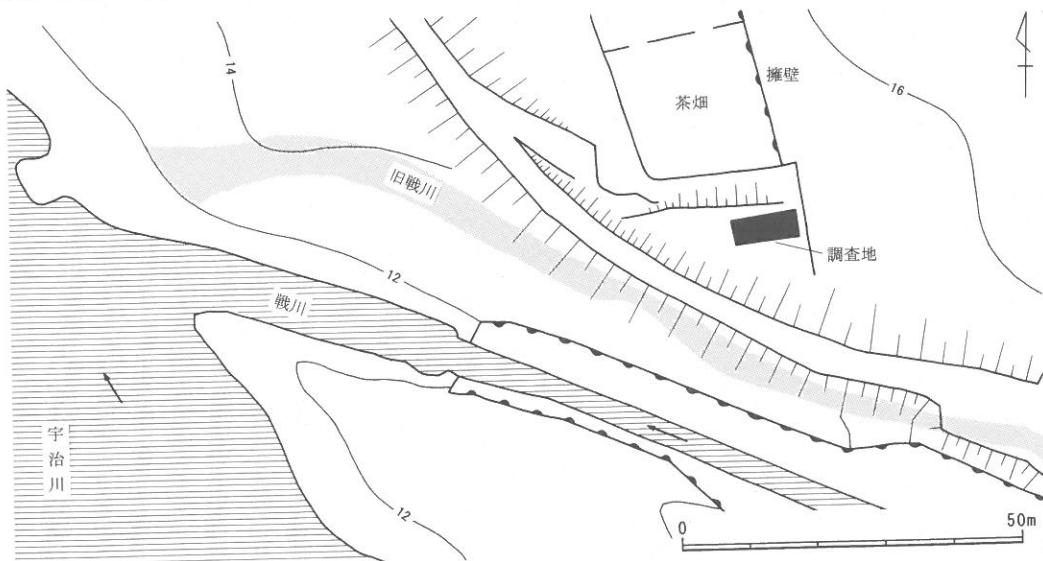


Fig.9 トレンチ位置図



Fig.10
調査地遠景(東から)



Fig.11
トレンチ完掘状況(西から)



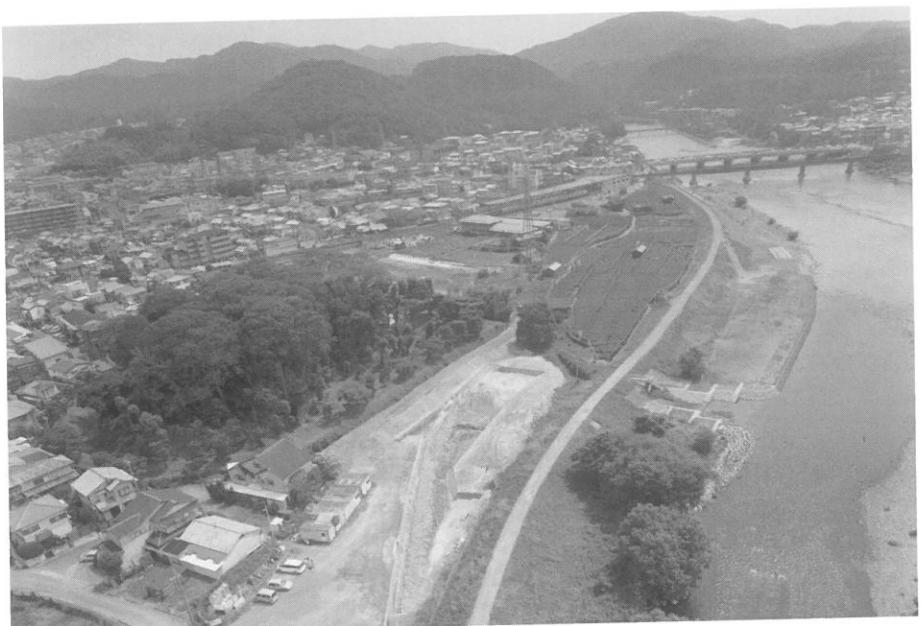
Fig.12 北壁土層堆積状況
(南西から)

写 真 図 版

遺 跡 写 真 P L. 1

検出遺構写真 P L. 2 ~ 14

出土遺物写真 P L. 15 ~ 16



1. 史跡宇治川太閤堤跡全景
(平成19年撮影・北西から)



2. A区の現在の状況
(南から)

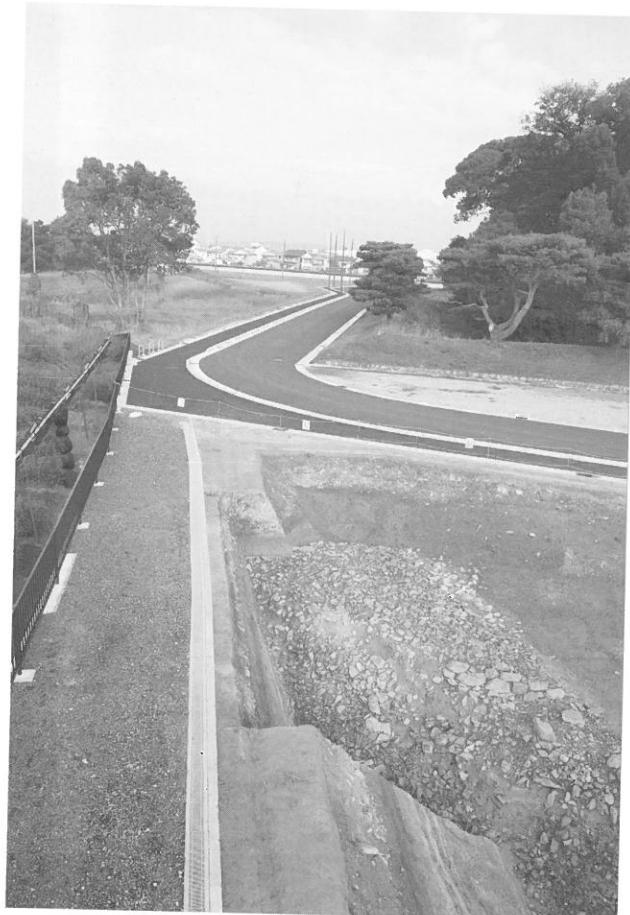


3. B区の現在の状況
(北西から)

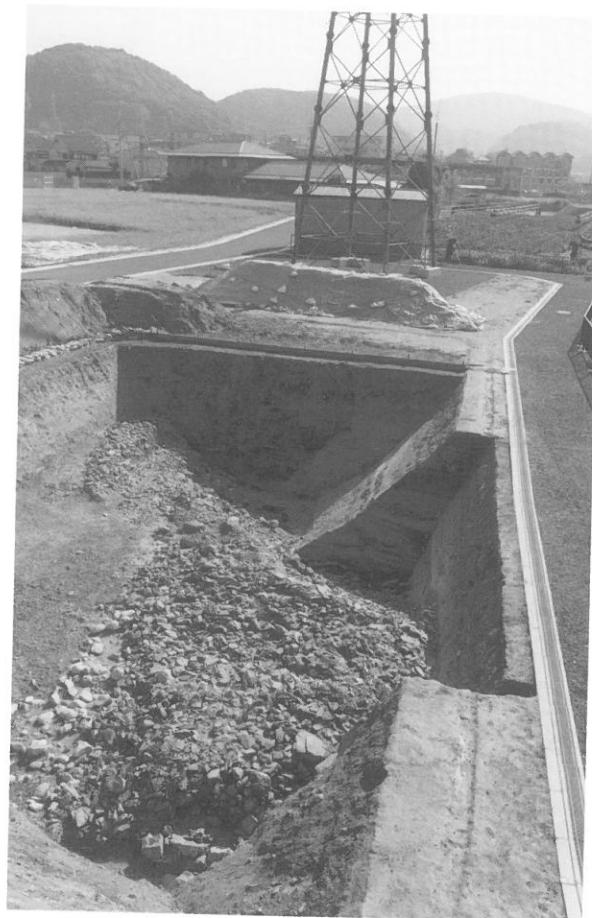
PL. 2 検出遺構写真 (1)



1. B0901 トレンチ全景（南東から）



2. B0901 トレンチ全景（南から）



3. B0901 トレンチ全景（北から）



1. B0901 トレンチ検出遺構全景（北西から）



2. B0901 トレンチ検出遺構全景（南西から）

PL. 4 検出遺構写真 (3)



1. B0901 トレンチ
検出遺構全景(南から)



2. B0901 トレンチ
検出遺構全景(南東から)



3. 石出し2上流側の様子
(南西から)



1. 石出し 2 全景 (南西から)

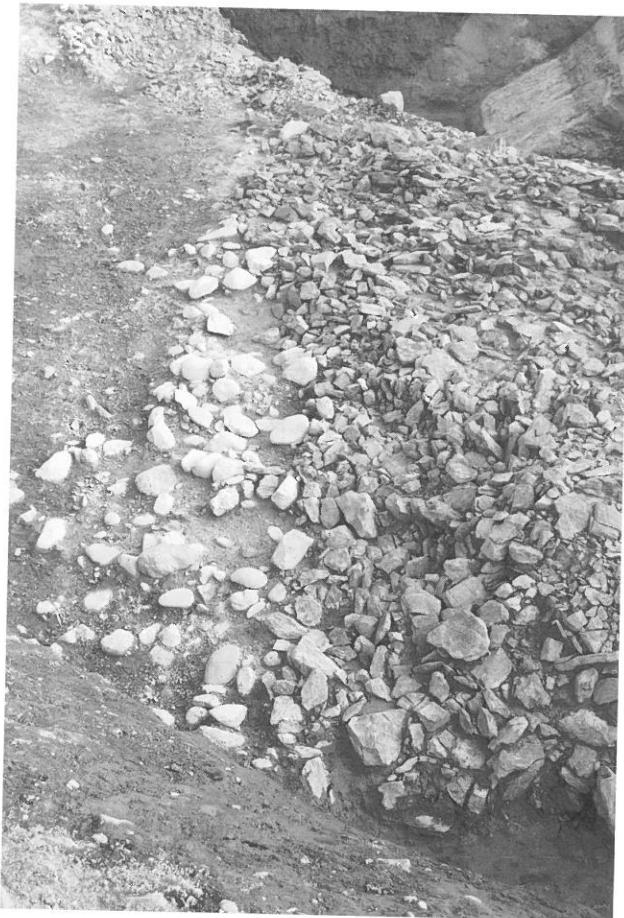


2. 石出し 2 全景 (北東から)

PL. 6 検出遺構写真 (5)



1. 石出し 2 上流側石垣（南から）



2. 石出し 2 背面（北西から）



3. 石出し 2 捨石部（南西から）



1. C0901 トレンチ全景（北から）



2. 石出し3全景（北東から）

PL. 8 検出遺構写真 (7)



1. C0901 トレンチ全景（北から）



2. C0901 トレンチ全景（北西から）



3. 石出し3全景（北西から）



4. 石出し3全景（南東から）



1. 石出し3天端石張りの
様子 (北西から)



2. 石出し3天端石張りの
様子 (南東から)



3. 石出し3天端石張り抜
き取り跡 (南東から)

PL.10 検出遺構写真 (9)



1. 石出し3全景
(南西から)



2. 石出し3上流側石垣
(南から)



3. 石出し3下流側石垣
(北西から)



1. C0902 トレンチ全景（南から）



2. C0902 トレンチ検出遺構全景（南から）

PL.12 検出遺構写真 (11)



1. S X 403と近世瓦窯跡
想定地(南西から)



2. S X 403 検出状況
(西から)



3. 東壁土層
(S X 403部分、西から)



1. 石出し 4 (南西から)



2. 石出し 4 部分(南西から)



3. 石出し 4 部分(南西から)

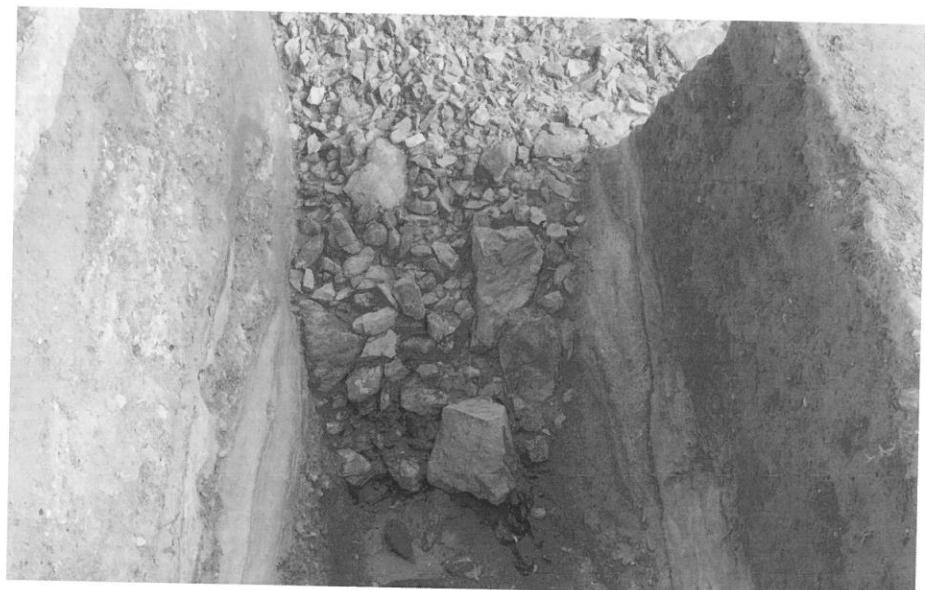
PL.14 検出遺構写真 (13)



1. 石出し 4 全景
(南から)



2. 石出し 4 捨石部分
(南西から)



3. 石出し 4 裙部
(西から)



1. S X 403出土瓦



2. S X 403出土瓦

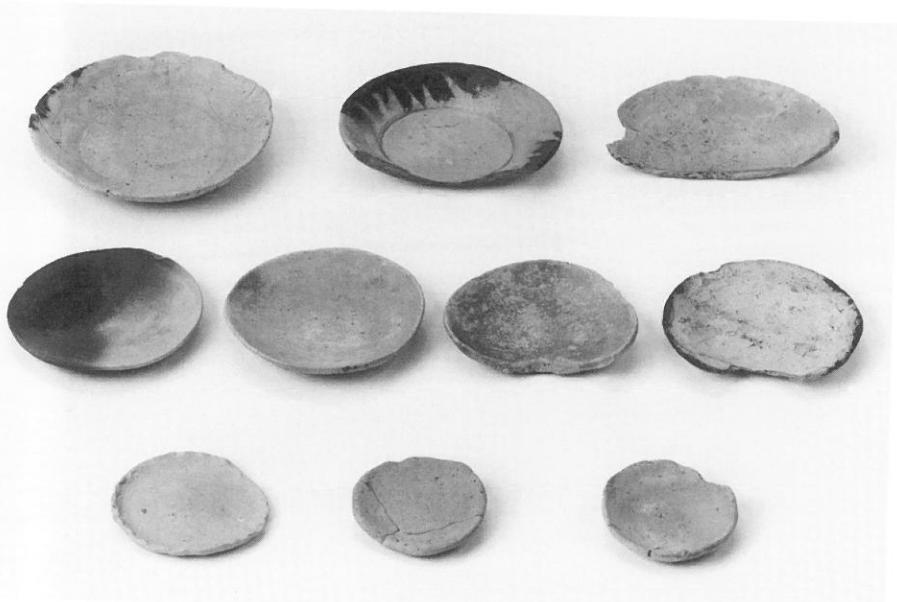


3. S X 403出土瓦

PL. 16 出土遺物写真 (2)



1. S X 403出土瓦質土器



2. S X 403 出土土器



3. S X 403 出土陶磁器

抄 錄

宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書 第78集

史跡宇治川太閤堤跡発掘調査報告書

発行日 平成22年3月31日

発行者 宇治市教育委員会
〒611-8501 京都府宇治市宇治琵琶33番地

編 集 宇治市都市整備部 歴史まちづくり推進課
〒611-8501 京都府宇治市宇治琵琶33番地

TEL 0774-21-1602
FAX 0774-21-0400
e-mail rekimachi@city.uji.kyoto.jp

印 刷 有限会社 新進堂印刷所
〒611-0021 京都府宇治市宇治妙楽9

